

Title	曾國藩について
Sub Title	Tsêng Kuo-fan
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1956
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.6, (1956. 12) ,p.65- 80
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00060001-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

曾國藩について

佐藤 一郎

一 序

ここでわざわざ曾國藩について考えてみる氣になつたのは、近ごろの近代文學史が五・四以前とのつながりをあまり考慮せずに取り扱つているとおもわれることと、近代前史の大物のなかでは曾國藩あたりが一番風當りが強く、なかなか正當な評價の機會にめぐまれないからである。たとえば臺灣の中華民國側では蕭一山の「曾國藩傳」を出し、何貽焜の「曾國藩評傳」^(註2)、蔣介石が題字を書いた「曾文正公全集」^(註3)等を再版し大いに曾國藩精神を鼓吹しているのに對し、中華人民共和國側では范文瀾の「漢奸劊子手曾國藩的一生」^(註4)等の専ら否定的な見解がはばをきかせている。

では實際には曾國藩はどのような業績をあげ、どのように生き、どのような點で現代につながっているのだろうか、ごく素樸なこんな疑問を自分で出してみて、それに答えるつもりで書いたのがこの小論である。もちろん非常に多方面にわたつて活躍した人のことであるから、おもにその信條と文章との關係にしぼつて考えてみたい。(だが、どうも問題がひろがるうひろがるうとしきりにするようだ。)

中國の近代文學史は、曾國藩前後からはじめるのが適當だともう。清末における新文學の口火をきつたのが桐城派の古文を奉ずる嚴復・林紆であり、そして同派が民國初年まで舊文壇に無視できない大きな勢力を維持し續けてきた以上、曾國藩まで遡るのは當然のことだともわれるし、ひるがえつて舊文學最後の人物として見ても、やはり無視することのできない達成を示している。それは恐らく、政治家として果した大きな役割にかわりなく、もつと公平に考えられなければならない性格のものといえよう。少なくともわたくしの見るところでは、彼は誠實な人間であり、地味で自己に嚴しい文章の作者である。そのような生き方の記録者としての面を尊重したいとおもう。清代の道徳の規範である儒教の教義に則つてはいるが、その完き實踐を求めはげしい努力のせいである。主義には同調できないにしても何か痛切に訴えてくるやはり力のようなものをもっている。おそらく、愛情・克己・勤勉・謙讓・節儉等の徳目は儒教のみの獨占ではなく、人類のながい歴史がそれぞれの民族の歴史のなかで育ててきた叡智に通ずるものがあるからだろう。

ただ、儒教では徳治主義に立つ政治的理想があり、普通、個人道徳に屬する徳目にも、常にその外延に政治的理想の雰圍氣がひろがつている。しかし一般に一つの倫理體系が成立してしまつた後においては、必ずしも生きた倫理として、人々の行爲を内面から律して、人格の形成に働きかけているとはかぎらない。儒教でもその點は同様で、ついには政治的秩序・社會制度の方から逆に遵守することを要求する、まつたく他律的な、さらに悪い場合には惰性的なものにまで墮落していたようである。官吏登用試験での八股文の採用は、學問への情熱を削ぎ、經典を硬化させ、官吏への道的手段としてのみ尊重することを習慣づけ、この傾向に拍車をかけていたのだつた。このような八股文先生とは異なつた立場からなのだが、老證學派も、やはり王陽明に極まつた儒教の實踐倫理的な性格を損なわせるのに、預つて力ありともわれる。

しかしながら根本的には、封建中國を支える世界觀である儒教の體系自身が、考證學派・桐城派のそれぞれの補強の努力にもかかわらず

らず、次第に崩解への道を歩んでいたことは確かで、桐城派の學統を享けてそれに諸學派の優れた點を折衷し、しばしの實踐的生命を與え直したのが會國藩であるといえよう。清末になるとヨーロッパ思潮の洗禮をうけた康有爲・梁啓超等の儒學の新解釋があらわれるが、もし人間のスケールの大きさを問題にすれば、儒教を維持し続けるために中國固有の諸學に補強の材を仰いだ最後の人が會國藩だと云つて決して間違ひではないと信ずる。

會國藩はあらゆる學派にかなり本質的な理解をもつ百家全書的な、そして基本的には宋學と古文を奉ずる學者だつた。それが歳とともに學識體験を増し、次第に獨自の豊かな肉付けがこれに加わるようになる。詳しくはまた後で説くつもりだが、もし國藩がこのようなことのみを人生のすべてとして嘉慶十六年十月十一日から同治十一年二月四日にいたる(811-1872)六十二年(墓誌銘による)の生涯を閉じたとしたならば、彼は清代のすぐれた實踐的な儒者の一人として、また文章家の一人として世人の記憶に止まるに過ぎなかつたろう。しかし、國藩にとつては幸か不幸か、太平天國の戰爭における清朝側の立役者として、軍事的な成功者として、さらには一世に絶大な勢威を振つた政治家として、強く世間に印象づけているのである。つまり言つてみれば、太平天國の偉大なる反革命家、これが現在彼が擔つている最大の稱號だともおられる。

しかしながら、經歷をたどつてみると、彼は進んで戰列に加わつたわけではない。それまで中央政府の文官として最後には禮部侍郎の要職にあつた會國藩は、兵部侍郎を兼任したことはあつたが武官であつたことは全くなく、咸豐二年母の死に會い歸省服喪中、再三の戰列に加われとの召をうけ固辭に固辭を重ねている。(年譜)咸豐二年十一月・十二月公四十二歳の頃)それが郷土愛と儒教的信念からひと度たちあがると、羅澤南等の協力をえて非常に強い最優秀の軍隊「湘勇」をつくりあげ、この時代にはすでに腐敗して使ひものにならなかつた八旗・綠營の清の中央軍に替つたのである。湖南人は素質的に剛氣にして素樸であり、軍人としての適性をもつていたが、その素質をひきだしたのは國藩だつた。(中央軍側からも民兵であり、規律正しい新しい軍隊だというので奇妙な反撥があり、敵視された。國藩はその調整に苦勞したが、衝突もあつた。)そしてついには李鴻章等の淮勇をも育成して、太平天國の覆滅に全力を傾注しているかにみえる。弟國荃をはじめ、國潢・國華・國葆の諸弟が活躍して、ほとんど一家總動員のおもむきさえあるが、その成果

については、おそらく彼自身意外の感に打たれたこととおもわれる。これは大變な苦勞の結果で、この間絶望もし、二回ほど敗戦を苦に自殺しそこなつてもいる。鐵のような信念一方の人間というより、絶えざる自己反省によつて、弱さを克服してきた人間とみた方が近いようだ。

戰陣に臨んでの能力には、その統率力の源泉となる人格の力を大きく評價する必要がある。大膽で細心、そして反省力にとみ愛情のふかい平生の國藩が、この時ほど高度に發揮されたことはない。危機にあつて高度に發揮される性格は、平生はただ淡淡と湛えられていたのだつた。そして一見淡淡とみえる前半生を、全力を盡して生きて獲得したものが、危機に處する眞の能力だつたのである。

しかし、またここでしかしと書く、彼は客觀的には反革命に寄與し、民族を裏切つたことになるのは事實だとしても（社會科學の教える歴史發展の法則をあてはめた場合）、まつたく反革命であるとの一片の自覺なしに、このような役割を果すというのは、いかなる因縁によるものだろうか。當時の中國、すなわちまだ傳統的な天下的國家觀のもとに生きている士大夫階級およびそのイデオロギー的影響下にある一般の人人にとつては、滿洲朝廷を異民族としてみることに馴れてなく（また滿清の彈壓と巧な民族政策のため）また革命思想が革命思想としての成熟と普及度に達していなかつたからであらう。革命勢力であるはずの太平天國自身の革命思想にはかなりの混亂がみられるし、傳統的な世界觀と對決してこれに徹底的な打撃をあたえるほどの力はもたなかつた。

曾國藩をめぐる評價のあれこれ（註6）にあつたためて運命の皮肉と歴史の厳しさをおもふが、これも曾國藩のなしたことで、彼の意圖しなかつたことだろうが、彼は中途で墮落した太平天國の主力（分流には太平天國の革命的理想が流れていた。李秀成を見よ。またさらに傍系には石達開のような、清冽な異分子もあつた。）を倒すことで、清朝の壽命を百年間のばしたにもかかわらず、實際には滿人の手から漢人の手に清朝の實權を奪取する上で、重大な働きをしているのである。

もう少し彼の業績をみてみよう。新軍隊の創設（墮落して後の軍閥の温床になつたが、郷土を背景とした農民兵の訓練は、中共の民軍組織に似ている）、造船・造兵・紡績その他、吏風の向上等において、中國の近代化にひとつの役割をつとめているのは事實である。もともと實踐を尊重する思想の持主である國藩は、太平天國と對決することで、古い中國にはとほしかつた國家に有用な組織と實利的な機

械を引出すことに或る程度まで成功しているようにみえる。現實の教訓のなから常に穩當適切な判断をくだし續けてきた彼は、富國の面で役に立つことはすぐに取入れるだけの積極性もつていた。國藩はどちらかというと獨創力におけるより、その抱擁力において仕事をする人であるといえよう。その仕事には、經驗の叡智が強くひらめいている。沈潜し、發酵するだけの時間を與えさえすれば、彼の抱擁力のなかで、地味ではあるが安定性のある仕事のエネルギーに變化するようにおもわれる。これはつまらない小細工で身につくものではない。國藩は誰よりも誠實に、力を盡して自分の生涯を送つただけである。のちの軍閥のように私利私欲のために行動したこともなければ、學問を虚榮のため、逃避のため、趣味のための具としてあそぶようなまねはしていない。大戰爭の渦中であつて理性の狂いはもちろん經驗したことはあろう。それを證明する例も多少はあるにちがいないが、常に立直つているという點でやはり大きな人物だつた。

三

曾國藩の出身について、少しく述べておこう。國藩は士大夫の家の生れではない。先祖代代數百年の間、農業に従事している家の出である。湖南省湘鄉縣荷塘都大界里の家は、祖父の竟希公・父の星岡公・母・叔父・兄弟の大家族で、好學の風はあつたかもしれないが、父がはじめて秀才になつていただけで、家學として傳わるような確乎たる學統はもたなかつた。太平天國の亂の戰場で父の死に會つたのだが、後年「誥封光祿大夫曾府君墓志」を作つて、次のように述べている。

「吾曾氏、家世々微薄、明より以來、家業を以て名を發する者なし。府君、積苦力學し、有司之試に應ずること十有七たび、始めて縣學生員に補せられるを得たれども、大施を獲ず。則ち發憤して諸子を教督す。國藩、進士を以て翰林に入れり。」

進士(註?)になつた國藩は京官の時代にも、戰場に臨んでからも、農業上の注意をこまごまと故郷に書送り、常に農を家業として意識していた事實を明らかに示している。ことに京官時代の最後、太平天國の亂の直前には、一時退官して農事に専念しようと意圖したほどで、

彼の血には精農といふか篤農といふか、日常生活のなかに勤勞と節儉を重んずる風が自然と泌みこんでいる。故郷では國藩の家は篤農家としての名聲がたかかった。若し彼の起居に目立たないが逞ましい力のようなものを認めるとすれば、それは決して篤農の精神と無縁ではないとおもわれる。

四

さて、いよいよ本題に入つて、新文學運動の遠祖としての、舊文學の最後の人としての曾國藩について語るまでに漕ぎつけたようだ。曾氏の文學とは、どのような性格をもつた文學かを要約するところだが、周作人に『中國新文學之源流』（松枝茂夫譯）という示唆に富む好著があるので、少しく引用することからはじめよう。

「假りに姚鼐を以つて桐城派の鼎を定めた皇帝であるとすれば、曾國藩は桐城派の中興の明主と云つていいでありませう。大體の上では、曾國藩はなほ桐城派の綱領に依據して居りますが、彼は又政治經濟の二類を加へ、且つ孔孟に對する見方、文章に對する見方にも、多少歩を進めて居ります。姚鼐の『古文辭類纂』と曾國藩の『經史百家雜鈔』の二者には極めて大きな不同の點があります。即ち姚鼐は經書を以つて文學と見なかつたため、『古文辭類纂』の中に經書の文章は入れなかつたのでありますが、曾國藩は經書の中の文章を選んで『經史百家雜鈔』の中に入れて居り、即ち彼はすでに經書を文學として見て居るのであります。故に曾國藩は金聖嘆ほど大膽ではなかつたけれども、相當開けた考へを持つてゐて、文學に對して多少とも理解があつたために、桐城派の思想は彼に至つてその形を改めたのであります。その後、吳汝綸・嚴復・林紓等の人々が起り、一面では西洋文學を紹介し、一面では科學思想を紹介し、かくて曾國藩によつて範圍を擴大された桐城派は、次第に新たに興らんとする文學と接近しはじめました。その後新文學運動に参加した人々、即ち胡適之・陳獨秀・梁任公等の人々は、みな彼等から非常に大きな影響を受けたのであります。故に、今次の文學運動の

發端は、實際に於いてやはり桐城派中の人物によつて引起されたものであると云ふことが出来るのであります。」

周作人の論旨は、次の三點にしぼることが出来るとおもわれる。即ち桐城派の傳統を享けてそれに弾力性を與え、範圍を擴大したと。經の中の文章を選んで、その文學的價値を認めたこと。後人への影響、殊に新文學運動の發端は桐城派の人物（曾國藩によつて擴大解釋された）によつて引起されたものであるとしている點は、注目しなければならぬ。

また胡適は「文學改良芻議」において、「さらに今の文學大家の文を見てみると、下は姚・曾（も）に規（ま）つき、上は韓・歐を師として……」云云といつているが、民國初年の舊文學の世界では桐城派の勢力は、一世を風靡した梁啓超の文章に、優に匹敵するだけのものがあつたようである。

では、考證學派と文學との關係はどうかとの疑問も出ようが、同派と文學とはあまり縁のなかつたことは事實のようだ。梁啓超は『清代學術概論』のなかで次のように述べている。

「清學（考證學）はみな、顧炎武を宗としており、文章もまた同様である。そして信條とするところは、一つには俗でないこと、二つには古くさくないこと、三つには餘計な枝葉をつけないことであつて、このような文體は學術的な説明に最も適しているようである。またそのために當時の所謂古文家とことごとく相容れなかつた。美文は、考證學派の最も不得意としたところである。諸先生方のうち、ほとんど一人として詩を能くする人はいない——文集には大抵詩を収めてはいるが、これはとおもうほどの人はなかつた……詞の上手といえ、一人張惠言あるのみであり、駢麗文を能くする者には、孔廣森・汪中・凌廷堪・洪亮吉・孫星衍・董祐誠が數えられる。その文章は、つとめて華美に流れるのを去ることを以て、學風としているが如くおもわれる。」

學問においてはいざしらず、傳統文學の擔い手としては、方苞・劉大櫛・姚鼐（これに「漢學商兌」の著者方東樹を加えるべきだろう）と續く桐城派の系列は、他の文學流派と比べその意義と勢力の點で、なんといつても清代の士大夫の文學の基本的な潮流といえよ

う。

そしてこれにやはり宋學の正統を引く郷土の環境も加わり、曾國藩に至つて一層經世致用の實踐的な性格を強めたのだが、桐城派というのは單なる文學流派ではなく一種の綜合學派であるから、意圖としては次のような大きな構造をもつていた。

1、義理——宋學 2、考據——漢學（考證學） 3、詞章——詩詞・駢文・古文 4、制藝（八股）の四種を、曾國藩にあつては義理・考據・詞章・經濟の四種を兼修し（制藝を落してゐるのに注意）、人間の完成を計ると共に、天下國家有用の人物となることが目的となつていたのである。それだから國藩の「聖哲畫像記」（咸豐九年作）にあげる三十二人の、以て範とした人物も、この標準で極めてひろく選ばれている。「……姚姬傳（篤）氏言う、學問の途三あり、曰く、義理、曰く、詞章、曰く考據。戴東原氏亦言う、文王、周公、孔子、孟子の聖、左丘明、莊子、司馬遷、班固の才の如きは、誠に一方體を以て論ずべからず。諸葛亮、陸贄、范仲淹、司馬光は聖門に在れば、則ち德行を以てして政事を兼ぬるなり。周敦頤、程顥、程頤、張載、朱熹は聖門に在れば、則ち德行の科なり、皆義理なり。韓退之、柳宗元、曾鞏、李白、杜甫、蘇軾、黃庭堅は聖門に在れば則ち言語の科なり、所謂詞章なり。許慎、鄭玄、杜佑、馬融、顧炎武、秦蕙田、姚鼐、王念孫は聖門に在れば則ち文學（現在の學問）の科なり。顧・秦は杜・馬に近く、姚・王は許鄭に近し、皆考據なり。」（陸王を探らなむことに注意）

このような、ひろい教養の上に立つ文學は、普通の文人がいう文章とか詩歌の類とは、同じく文學、詩歌と稱えながらもかなり異なるものがあることは、容易に想像できよう。つまり、文學以外の分野にかかる比重が重いために、彼の文學自身も逆に外からの拘束を受け、性格づけられる。いな、正確にいえば「政治家としても有名な人であり、其の他いろいろの點で有名な人」（『清朝史通論』内藤虎次郎）である所以を究めなければ、彼の文學を論ずるわけにいかなくなる。彼の場合、その活動分野が並列的に横にひろがるのではなく、體系的な全體のおおの面である點、問題は一層困難になる。彼はただ單に花鳥風月を友とする文人でもなければ、狭い傳習的な完成に近づこうとする道學者流でもない。この困難におもひ至つたときに、なんとか文學に極限（しかし、民國以前の士大夫の文學とはいかに今日の文學の概念からはみだしやすいか）できないかと苦心した。しかし、これをやると彼の人間像がどうしてもまろく浮んでこない。そこでこうして、彼の實踐的な倫理觀と、それに裏付けされた日常生活、社會活動の全體を不完全ながら手もと

に、引寄せるようにして話をすすめる仕儀になる。そしてこの道だけが曾國藩の文學の性格を明らかにする、唯一筋の道であることをあらためて信ずるのである。

五

ここで考えようとするのは、彼の文學者としての達成の性格についてだが、まず全集を手にして氣附くことは、量的にみて最も少ないのが詩文集であるという事實である。文集はわずかに三卷・詩集は三卷に過ぎない。『曾文正公全集』は百五十六卷(他に多くの版本あり)あるのだから、著名な文章家としてはいささか意外の感なきわけにはいかない。その文集もよく見ると、書序であり壽序であり家傳であり神道碑銘であり、墓志銘といつた具合なのだ。そのほとんど八割以上が、人からの依頼を受けてはじめて書かれた文章だと云えよう。なかには依頼をうけて數年間経つてから、或いは依頼者の死後に書かれたものもある。墓志銘では、太平天國の戰爭における舊部下のための文章の數が目立つ。詩も、古人の詩を讀むのは好んだが、自分から進んで作るほどの興味は、あまり強かつたとはいえない。これは如何なる意味を持つものだろうか。いろいろの意味もあることだろうが、何よりもまず無用の文章を作ることを潔しとしなかつた現われであると解釋するものである。云つてみれば曾國藩は文學に第一義的な意義を見出してはいたわけではない。その信念の根本には、變形はしているが、やはり朱子學の經世致用の思想が流れていることを、ここで確認しておこう。それが桐城派の古さを超越えてあらわれた梁啓超にいわせれば、「文を以てこれを論ずれば因襲・矯揉であり、才能の見るべきはないし、學問を以て論ずるなら、空疎を獎めて創獲の邪魔をする。社會にとつて益がない。且つ清代の學界にとつて、終始未だかつて重要な位置を占めたことがないし、今後も亦、斷じて復び自存することはなからうから、これを論じないだけのことだ。」(『清代學術概論』)となるのだが、實は社會にとつて益があるとうと願う文章の最たるもの一つが曾國藩の文章である。直接にはつながらないかもしれないが、明末清初に反清運動を徹底的に貫ぬいた王船山の遺書(註8)を世に出しているなど、實踐的な關心のおおいに深い人間であるとおもうのである。

「全聖嘆ほど大膽ではなかつたけれども、相當開けた考えをもつていて文學に對して多少とも理解があつた。」とは周作人の評言だが、ここでいう文學とは俗文學を指していると受取れる。曾國藩の文學理解の範圍は、傳統的な士大夫の文學の範圍よりもかなりはみでている部分があつた。もちろんこれが彼の文學の本筋ではないが面白い。

曾國藩の文學觀をよく示しているとおもわれる章句を擧げてみよう。もちろん彼が詞章の學と呼んでいた部門が今日の文學の語義と一番近いわけで、今日の小説の類については「紀氏嘉言序」で次のように評價している。「……河間の紀文達公、博覽彊識、百家之書、其の原を辨まえ、其の歸を竟さざるは靡し。著す所の『閔微草堂筆記五種』、考獻徵文、搜神志怪、衆態畢ごとく具わる。其大旨は勸善懲惡に歸し、中國聖人流傳の至論を崇む。亦佛氏之説を廢さず、愚民の入り易き者を取る。……」搜神志怪も勸善懲惡、俗耳に入り易きものとして、その存在は認めているわけである。これは桐城派の元祖となつた人人の純正なる古文だけを信ずる態度から比べると、傳統的な勸善懲惡の方便を認めているだけでも、たいした進歩だといえよう。この抱擁力と云うか、應用力と云うか、何かさういつた現實への理解力が、小説は作らなかつたが俗謡の形式——一種の數え歌のようなもの——を取り入れた「水師得勝歌」并序、咸豐五年江西南康水營作「陸軍得勝歌」咸豐六年在江西南昌省城作「愛民歌」咸豐八年在江西建昌大營作「解散歌」咸豐十一年在安徽祁門大營作の四部作にはつきりと示されているとおもう。全部七語から成る單調な歌詞ではあるが、梁啓超あたりが後に富國強兵の觀點から作つた「軍中歌」に先んずること遙かなるものがある。「水師得勝歌」の序には「……是に於て水師の規制、略々定まる。將卒も亦略々水戰の法を諳んじぬ。遂に水師得勝歌を製し、士卒をして歌誦せしめ、口相習いて以て熟し、其の大略に嫻わしめんと冀がう。而して其の臨陣の神明變化、則ち及ぶ能わざる有る也。歌に曰く、三軍聽我苦口説、教爾水戰真祕訣。第一船上要潔淨、全仗神靈保性命、早晚燒香掃灰塵、敬奉江神與礮神、第二……」といつた調子である。

ついでに附加えておけば、芝居は見ているようで、王啓原編するところの「求闕齋日記類鈔」にも次の文が見える。「何宅に在りて崑腔を唱うを聴く、我心甚だ静かにして且つ和かなり。因つて古樂陶情淑性其の人に入るの深きを思う、……」(註9)しかし、もちろん積極的に戯曲を書くほどの關心は別になかった。

では、次に詞章の學についての彼の考え方をその「求闕齋日記類鈔」から選んでみよう。「義理の學あり、詞章の學あり、經濟の學あり、考據の學あり。義理之學は即ち宋史の所謂道學也。孔門に在りては德行の科と爲す。詞章之學は孔門に存りては言語の科と爲す。經濟之學は孔門に在りては政事の科と爲す。考據之學は即ち今世の所謂漢學也。孔門に在りては文學の科と爲す。此四者は一を闕くも不可なり。」とはば「聖哲畫像記」で述べたことを記述したのち、詞章の學についてさらに具體的に「詞章の學、吾之從事する者二書焉、曰く曾氏讀古文鈔と曾氏讀詩鈔の二書なり。皆、尙未だ纂集帙を成さず。然れども胸中已に竹を成す有り。」(辛亥七月)と自著を擧げている。ところで義理の學、經濟の學、考據の學ではどうかと云えば、義理の學では四子書・近思錄を、經濟の學では會典・皇朝經世文編を、考據の學では從事するものとして易經・詩經・史記・漢書を擧げているのだが、いずれも獨立した一書を自ら編むまでには至らない。ただ「求闕齋讀書錄」などにその成果を散見するだけである。詞章の學での假題は後に「經史百家雜鈔」二十六卷となり、「十八家詩鈔」二十八卷と見事に結實するもので、この限りでは詞章の學——今日の文學部門での仕事が、實際には一番はかどっているようである。前者は卷之一・二が論著之屬、以下詞賦之屬、序跋之屬、詔令之屬、奏議之屬、書牘之屬、哀祭之屬、傳誌之屬、敘記之屬、典志之屬、雜記之屬となつており、その序例に云うように、「姚姬傳氏の古文辭を纂して分ちて十三類としたのを、余は稍よ易きに更えて十一類と爲した」ものである。例えば論著之屬一にあつては、書洪範。孟子齊桓晉文之事章、養氣章、神農之言章、好辯章、離婁之明章、魚我所欲也章、舜發於畎畝章、孔子在陳章。莊子逍遙遊篇、養生主篇、駢拇篇、馬蹄篇……といった分け方をし、一本のなかから自由に選擇して、各篇も必ずしも全文を採つてゐるのではない。そして時として段落を分ち、短評を試みてゐるのである。第二十六卷の最後は姚鼐の「儀鄭堂記」でもつて終つてゐる。

また、別の機會に「曾文正公家訓」のなかで長子紀澤に「余、四書五經の外に於いては、最も史記・漢書・莊子・韓文の四種を好む。

……又通鑑・文選及び姚惜抱（鼐）選ぶ所の古文辭類纂、余選する所の十八家詩鈔の四種を好む、共に十餘種に過ぎず。早歲、篤く學を爲さんと志す。恒に此の十餘書を將て、貫串精通、略々劄記を作り、顧亭林、王懷祖の法に仿わんと思ふ。……（咸豐九年四月二十一日）と書いている。劄記の方は、あまりいい成績ではなかつたが、好むところの「古文辭類纂」の體裁を踏んで、この「經史百家雜鈔」に先人の業績を整理したわけである。では、曾國藩自身の古文は、どうだつただらうか？

曾國藩は云つてゐる。「余古文の一道に於ける、十分の已に六七を得たり。而して智を竭し力を畢す能はず。」（求闕齋日記類鈔）例によつてあとに、反省の言葉がついてはいるが、自分の能力と成績について謙讓を極めた彼の言葉だけに、古文の達成にはかなりな自負を持つていたと判断してよさそうである。奏稿三十六卷、批牘六卷、書札三十三卷、鳴原堂論文二卷、讀書錄十卷、孟子要略五卷、詩集三卷、文集三卷などの外に、家書・家訓及び全集に後れて出版された龐大な日記がある。このうち、奏稿・批牘の数は國藩が勉勉なる能吏であつた事實を物語つてゐるが、興味のあるのは書札・家書・家訓・鳴原堂論文・讀書錄・日記のように、より多く彼自身によりそつた文章の數々である。これ等はその生活態度を、日常の瑣事、微妙な心理の動きに至るまで、實によく記録してゐる。このように作者の生活の表裏を、あますところなく語つてゐるのは、當時としては稀有な例に屬すると云いえよう。また、このことが同時に彼の文章にもごく自然に影響してゐることは、彼の文學の爲には好い結果をもたらしたのだつた。

とくに「曾文正公家訓」「家書」（全集に見當らず。同治甲戌十三年一百六十八卷本、光緒二年德傳忠書局一百五十六卷本、民國九年上海書局版一百七十七卷本）はなぜか全集には永らく採用されなかつたのだが、その文章は總體に平易で、十分に意をつくつてのびのびとしてゐる。やたらに故事・熟語が出てくるようなことはなく、また俗に流れずして適度に俗語を交え、深い教養と體驗に基づいた、豊かな人生智が、地味に靜かに輝いてゐる。いうならば、ここには古文の日常性への接近があり、血の通つた温かさが感じとれる。この日常性は、注意して見なければ彼の文章の主張の節々にも讀みとれるかとおもうが、巧まらずして——それ程自然に出來てゐる——見事な成果を收めたのが「家書」「家訓」である。これは名文とか、至藝とか、およそ技術的な修鍊の結果であると言ふよりも、人間の圓熟の結果、淡々と自己を語り、
他を諷す、自在な境地——たえざる克己の到達點としての——と表裏一體をなしていることに、改めて思い至らないわけにはいかない

そして國藩はまた、彼自身の書簡體の獨自性の歴史的意義は、ある程度まで自覺してはいたのだつた。「類纂選する所の書牘、盡くは吾が心を厭さざる者あり、未だ古人の書牘何者をか最善とするやを知らず」とも「古文の中、惟書牘の一門のみ竟に佳なる者鮮なし。八家中韓公差や勝る。然れども亦書簡の正宗に非ず。此の外は則ち竟に采る可きなし。」(求闕齋日記類鈔)もしこれが眞實とすれば、これほどすぐれて表現に密着している人間國藩を、今こそ、彼自身の生理により多く寄添うて説くべきであらう。手もとの「家訓」からいくつかその人間を語る顯著な例を擧げてみれば、家訓の冒頭(咸豐六年)次子紀鴻(紀澤の弟)に宛た文中に次の言葉がある。おそらく總序と呼ぶのが適當とおもわれるほど、その信條を簡潔に示して餘すところがない。「凡そ人、多くは子孫の大官と爲るを望む。余、大官と爲るを願わず、但讀書明理之君子と爲るを願う、勤儉自ら持し、勞に習い苦に習いて、以て樂に處す可く、以て約に處す可きは、此れ君子也。余、官に服すること二十年、敢て稍かも官宦の氣習に染まず、飲食起居寒素を守るを尙ぶ、家風極めて儉にして略々豊かなるは可なり、太りに豊かなるを可とするは吾敢てせざる也。凡そ仕宦之家、儉より奢に入るは易く、奢より儉に返るは難し。爾年尙幼し、切に奢華を貪愛す可からず、懶惰を慣習とす可からず、大家小家士農工商を論ずる無く、勤苦儉約にして未だ興らざるは有らず。驕奢倦怠にして未だ敗れざるは有らず、爾讀書寫字、間斷す可からず。」またさらに續けて「早晨には早起を要す、高曾祖孝以來相傳之家風を墜すこと莫れ、吾父吾叔、皆黎明即起せしは爾之知る所也。凡そ富貴功名は、皆命の定まれる有り。半ばは人力に由り、半ばは天事に由る。惟學びて聖賢と作るは、全て自己に由るを主として天命と相干渉せず。吾學びて聖賢と爲るの志し有るも、少時居敬の工夫を缺き、今に至りて猶偶戲言戲動有るを免れず、爾宜しく學止端莊にして言妄りに發せざれば、則ち入徳之基也。」

ここには人間完成の傳統的な方式——即ち士大夫階級の理想像への努力の方向が説いてあるが、そしてまた當時の清廉な士大夫の理想からそんなにかげはなれたものではないのだが、不思議と自己の人間修業の集積から滲みてた説得力を持つ味わいを伴うのである。その實踐を缺き、教養の幅を持たなければ、一種の圖式に陥る危険もなくはないのに、懇切で嚴格な、ひとときわ高い達成に曾國藩とその文章は立つているのが讀みとれる。「讀書明理之君子」と爲るを願ひ、「飲食起居寒素を守るを尙」び、「切に奢華を貪愛す可からず、懶惰を慣習とす可からず」との戒めも、「吾學びて聖賢と爲るの志有るも、少時居敬工夫を缺き今に至りて猶偶戲言戲動有るを免れ

ず」との反省も、すべて自分自身に課した規範であり、或る意味では最も親しい者に對して自己の弱點を明かし、退くことが出来なくするような、自身の鍊成のための鞭であろう。その反省の嚴しさは、「曾文正公手書日記」にあますところなく出てゐるが、子弟の教育に當つても、常に自分自身と向かい會つていたのだつた。彼は自分に對する時に最も嚴格で、他に對する時には比較的寛容である。どのような人を評價して、自己とひきくらべて反省し、かつは子弟を戒めてゐるかを見ておきたいのだが、孔子及び朱子、姚鼐等の言葉は、あまり多くなるので、他流と見なされる人人についての評價を主として擧げることしよう。彼自身はさしたる學問的業績は持たないのだが、或いはそのためにかえつて考證學派の業績にあこがれ、高く評價する傾向が生れたのだろうか。同じく桐城派に屬する方東樹が、その著「漢學商兌」において「近世漢學考證者、著書を爲り、宋儒を闢き、朱子を攻むるを以て本首と爲す有り」となし、かなり綿密に實例を追つて批判する嚴然たる態度と比べると、學問と人柄の違いを改めて感じさせられる。曾國藩は云つてゐる。

「……國朝の大儒、顧・闕・江・戴・段・王數先生之書、亦熟讀せざる可からず」と獎め、

「本朝の大儒、顧亭林より外、最も高郵の王氏之學を好む。」さらに王氏三代の業績を述べた後に、「爾試みに取りて一閱す可し。其の知らざる者は信を寫して來り問え。本朝經を窮める者、皆小學に精なるも、段王兩家之範圍を出ざる耳。」としてゐる。

また一書に專なるべきことを説いては、まず韓退之、柳宗元の例からはじめて、最も王氏父子の讀書法を述べて詳しく、「爾讀書に志有りて必ずしも漢學之名目を別標せざるとも、而も數君子之門徑を一窺せざる可からず。凡そ見る所聞く所有らば、隨時に稟知せよ。余隨時に論答せん。當面の問答を較ぶれば、更に長進し易し。」と結んでゐる。

これは逆の立場から見れば、考證學派の學問的業績の搖ぎなき地位を證明する材料となるのだから、曾國藩に即して云えば、彼は役にたつものに對しては全體のバランスを失わない限りにおいての積極性をもつていたとおもわれる。現實の状況に基づいて意見を持つ健康な智慧の持主である。それ故江慎修に對しては、その「類腋及び子史精華淵鑑類函は、則ち鈔す可き者尤も多し矣。爾試みに之を爲せ、此科名之要道、亦即ち學問之捷徑也、此れを論す。」と云い、古文尙書の研究で決定的な成果を収めた闕百詩に對しては、「……吳才老及朱子、梅鼎祚に至りて遂に一書を專著して以て之を痛辨し、名を疏證と曰う。是れ自り之を辨する者數十家、人人皆僞古文僞

孔子を稱する也。日知錄中、略々其の原を委す。王西莊・孫淵如・江長庭の三家、皆詳しく之を言う」となし、その研究の経過についても、行届いた理解を示している。

「家書」はこのようにして、古文の道を説き、學問の在り方を説き、日常の道徳を説き、人間の生き方を説いて止まないのだが、さらによく曾國藩について考えたうえで、何らか新しく得る所があれば、この續きを書いてみたいとおもう。

(註1) 蕭一山著「曾國藩傳」中華文化出版事業委員會 中華民國四十二年一月初版 (現代國民基本知識叢書) 202P 内容・引子

第一章 家庭環境 第二章 經世之禮學 第三章 學術背景 第四章 思想體系 第五章 天才與志氣 第六章 京官時代の政論

第七章 湘軍編練及其特點 第八章 太平天國の平定 第九章 改造舊社會與建設新事業 第十章 湘淮軍代興的關係

(註2) 何貽焜編著「曾國藩評傳」 正中書局 中華民國二十六年七月初版・四十二年十二月臺灣一版 617P

(註3) 「曾文正公全集」 世界書局 「題字」曾滌生先生全集 蔣中正 民國四十一年五月 鄉後學李鴻球「識語」

(註4) 單行本・一九四九年初版一九五一年再版については「太平天國と曾國藩の功罪褒貶」中山久四郎……「歴史教育」2卷12號に紹介がある。

「中國近代史」上册 人民出版社 一九四七年二月第一版 五五年九月第九版 九版説明…「漢奸劊子手曾國藩の一生」は一九四四年我在延安時寫的。曾國藩は近百年來反動派的開山祖師、而他的偽善喬裝却在社會上有很大的影響。他的繼承者人民公敵蔣介石把他推崇成「聖人」、以爲麻醉青年、欺蔽羣衆的偶像。爲了澄清當時一些人的混亂思想、所以有揭穿曾國藩眞個漢奸劊子手本來面目的必要。這篇文章便是在這種情況之下寫出的。現在仍把它附在書後、其中某些部分是可與本書所述太平天國部分相互補充、印證的。

(註5) 「曾文正公年譜」(黎庶昌編)

公又附片奏稱、臣在京供職十有四年、今歲歸來。祖父母之墓、已有宿草。臣母之葬、亦未盡禮。若遽棄庭闈、出而蒞事、萬分不忍。

(註6) 註1~4の評價等。

(註7) 「曾文正公年譜」道光十八年公二十八歲。……公中式第三十八名進士。……四月、正大光明殿覆試一等、殿試三甲第四十二名、賜同進士出身。朝政一等第三名、進呈宣宗、拔置第二名。五月初二日引見、改翰林院庶吉士。……

(註8) 「船山遺書」同治四年湘鄉曾氏棗子金陵節畧。

「船山遺書序」(國藩)王船山先生遺書、同治四年十月刻竣。凡三百二十二卷。國藩校閱者、禮記章句四十九卷、張子正蒙注九卷、讀通鑑論三十卷、宋論十五卷、四書易詩春秋諸經釋考異十四卷、訂正譌脫、百七十餘事、軍中鮮暇、不克細紬全編、乃爲序曰……

(註9) 「曾文正公手書日記」辛丑年(道光二一)正月……晴十九日……夜請父親携九弟來館看炒戲。